淨土

1983—4

昭和十年五月二十日　（第三種郵便物認可）
昭和二十四年四月二十八日　運輸省（[illegible]）
昭和五十八年三月二十日印刷
第四十九巻　四月号

花まつり

四月八日は、お釈迦さまのお生まれになった日。仏生会とも降誕会とも灌仏会とも呼ばれるが、私たちには「花まつり」といった方がなんとなく親しみやすい。桜の花をはじめ、あまたの春の花々が繚乱と咲きはじめる好季、お釈迦さまのお誕生を祝し、心よりなつかしんで誕生仏に追慕の想いを寄せて手を合わせるのである。

幼な子も手を合わせます甘茶仏
花まつり稚児の行列にぎやかに

花御堂のなかの、右手で天空を、左手で大地を指さすかわいらしい誕生仏に甘茶をかけて、心からお祝いいたし、私たち自身の心にもやさしい愛の花を咲かせるのである。お釈迦さまが誕生されたという尊い一大事を、深く銘記し、改めていのちの尊さ、大切さを確認して、一日、百花の咲きほこるなかで、安らかな時を過ごすのである。

どうか私たちも、父母や子供たちと一緒に、お釈迦さまの尊い、ありがたいいのちを受け継がせていただいて幸せな明かるい生活ができますように。

（勝崎裕彦）

四月号

我れ超世の願を建つ、必ず無上道に至らん、この願満足せずんば、誓って正覚を成ぜじ。

――『無量寿経』四誓偈

目　次

――法　話――

御忌におもう
――『近代の法然論』に触発されて――……大　橋　英　正……(2)

因縁ばなし二つ……高　麗　義　光……(12)

㊀㊁�法㊙

仏は平生から行者を守り給う……村　瀬　秀　雄……(16)

花まつりに寄せて……三枝樹　亮　成……(7)

エッセイ　霞と朧……木　下　隆　一……(18)

<寄稿>

末法の世に仏教を思う……上　野　　浩……(21)

仏教行事二年

四月、花まつり……鷲　見　定　信……(26)

<読者のページ>

念仏諸行……島　田　信　一……(31)

<新刊紹介>

『念仏ひじり三国志』を読みて……渡　辺　杜　水……(34)

浄土句集……一　田　牛　畝　選……(24)

<表紙裏・巻頭言> 花まつり……勝　崎　裕　彦

念仏ひじり三国志 (107) ――法然をめぐる人々…寺　内　大　吉……(37)

表紙　大西耕三画

カット　大正大学美術部

法話

御忌におもう

―『近代の法然論』に触発されて―

大橋英正
（東京・虎の門長谷院住職）

(一) 四月の御忌

東京に住んでいる関係で、四月ともなると、十三日から十五日まで営まれる増上寺の御忌法要が、まず頭に浮んでくる。

管区内から推薦された唱導師拝命の諸大徳がまごころをこめて、懸命に、しかも如法に、報恩の法要を厳修され、それを契機として、これからの一層の精進の誓いを新たにされることである。

下旬になると、京都の総本山知恩院に於ては、十八日より七日間のご法要がつとめられる。

四月七日が宗祖ご生誕、八日が花まつり、の記念すべき日にあたるのと思いあわせて四月は私ども念仏の徒にとっては、まことに意義深い仏道策励の月というべきであろう。

㈡ 御忌とは

「本来御忌というのは、天皇皇后等の御忌日に行われる法会を指すのであるが、大永四年（一五二四・甲申）正月十八日後柏原天皇が知恩院第二十五世超誉存牛に勅して、「……一七昼夜法然上人の御忌を修せしむべきなり……」と宣うたので、爾来法然上人の忌日の法会に御忌の称を用いることとなったのである。」（「仏教布教大系、第八巻）

これが「大永の御忌鳳詔」といわれ、爾来知恩院において、毎年正月法然上人の忌日を迎えるごとに、この勅語を奉じて、一七日昼夜、報恩謝徳の大法会が営まれてきたとされる。

なお、「知恩院では、十八日の夜、経の紐解（ひもとき）といって、僧侶が阿弥陀経を誦しつつ行道を行い……」（西角井正慶編「年中行事」）としているが、いまでも、紐解という言葉と行事が残っているものであろうか。

㈢ 陽暦四月の厳修へ

正月に御忌法会が行われたころは、年初の仏教行事として、京都の人はこの日が一年の遊覧始めであるという意味で、弁当始めといったとされているが、当時は一般の人々にとけこみ、その生活にアクセントをつける節目ともなっていた模様で、御忌詣には衣裳の華美をきそう風があり、これを御忌小袖といって流行のさきがけをなしたと前掲書にある。

着だふれの京を見に出よ御忌詣　　几茎

また、「東都歳時記」によると、一月二十五日の項に、「御忌法会　浄土宗円光大師御忌によりて、浄家寺院昨今法会を行う。芝増上寺、一山惣出仕あり。参詣おほし」とある。

それでは、陰暦の一月に営まれていた御忌法会が、

いつ頃から陽暦四月に行われるようになったものであろうか。

「浄土宗大辞典」の教えるところでは、明治九年（一八七六）時の門主、順誉徹定上人の鹿児島地方ご親化の日程のご都合が、そのきっかけということであるが、更には、陸海の交通事情がよくなり、全国からの門末道俗の知恩院参詣が便利となり、更にまた、かねてから関係者一同の、「御忌法会奉修は、花の四月に」という切なる願いとが重なって、期せずして、その翌十年から実施されるにいたったと伝えられている。

とすると、四月勤修となってから、その後変りがないとすると、いまでは、もはや一世紀以上の星霜を経たことになり、これがすっかり定着したといえよう。

(四) その意義

御忌法会を奉修する意義を考えてみると、いろいろと、いう言葉もあろうけれども、「浄土宗法要集」御忌会別式の諷誦文に要約されてはいないだろうか。曰く、

「……遺法尊崇の念禁じ難く(一)、鴻恩報謝の情切に催し(二)、聊か威徳を称揚し(三)、本誓を荘厳し奉る(結)」

と。わたくしどもは、うけがたい人身をうけ、あいがたい仏の本願にあい、おこしがたい道心をおこし、はなれがたい輪廻の里をはなれ、生れがたい浄土に往生すること、この悦（よろこび）の中のよろこびがいただけること、万徳帰一の念仏の生活に、日々が生かされる、この仏縁の有難さ不思議に思いをいたすとき、宗祖法然上人に対し奉り、上酬慈恩の祈りは当然であり自然の趣くところ、「三業の誠を抽でて、法要を修し、依って以て聊か広大慈恩の万一に酬い奉らん」（御忌会表白）ことになる。

しかしながら、「聊か威徳を称揚し(三)、本誓を荘厳し奉る(結)」となると、わたくしのような凡愚にとって、甚だ困難といわざるを得ない。

(五) 法然上人鑽仰

過日、峰島旭雄・芹川博通両先生の編著、「近代の法

然論」（みくに書房）を成瀬隆純氏より拝受した。氏も亦、両先生のご指導のもと、その仕事の一部をお手伝いなさったようであるが、威徳称揚と本誓荘厳という当面の問題に関して、たいへん貴重なお示しをいただけたと感謝している。以下いささか紹介させていただきたい。

同書の序説で、「近代の法然論」というのはなぜか、ということについて、

「ここでは、日本近代、すなわち明治以降の百余年の間に、どのような法然論が展開されたかを、点と線でたどってみるのである」

とされ、さらに、「法然論をとくに近代に限ったこと」の「その意味とは何であろうか」と続き、次のように述べられる。

「まず、明治以降において、仏教学そのものが近代化され、客観的・実証的な研究が行われるようになった。ただ祖師をうやまうという信仰優先の祖師論が、信仰は信仰として、もっと突っ込んで、祖師の〝人間〟にまで立ち入って、しかも客観的・実証的なデータをもふまえての祖師論へと、変わっていったのである。このことが法然論にも影響を及ぼさずにはおかないことは、明らかである。そして、近代日本の歩みが示しているように、それは、思想の面において、西洋思想の摂取と同化、それに追いつき、追い越すことの営みを抜きにしては、考えられないものであった。このような傾向の中で、つまり、一般に近代思想といわれるもののるつぼの中に投げ入れられて、われわれの法然論はどのような変貌をとげたであろうか」（同書八―九頁）

との提起をされ、

「一言でいえば、法然論の場面の拡大と重層化である」

としておられ、代表例として、大きく七分類され、それぞれについて、十五の各論が用意されている旨を明らかにされている。

各説第十五の「現代の法然論」においては、次の言葉がある。

「端的にいおう。われわれは現代に生きる。現代の法然論が無かるべからざるゆえんである。そして、その法然論は、近くは近代の法然論をすでに一つの伝統と

して自己自身の裡に担い、遠くは法然浄土教そのものに直参しなければならない。かかる二重の意味において、われわれはここに、「近代の法然論」を取り上げようとする」（同書二一三頁）

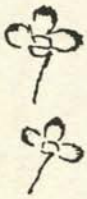
これまで示されたことは、「法然論」ということばで表現されてはいるが、「祖師の〝人間〟にまで立ち入る」ことを含めて考えるならば、威徳称揚・本誓荘厳ということに関して、まことに示唆に富む多くのものが含蓄されていると思う。

明治以降の先覚・先導の諸師が、元祖上人に対し奉り、おのおのが与えられた時と所と諸縁とにしたがって、自己の「全人格」を傾到していかに宗祖に「直参」することを果たされたか。念仏を基底とした宗教生活を、どのように具現・表出されたか。こうしたことを、後凡のわたくしどもが、追跡、確認してそれに倣うことは、元祖上人の立体的にして、かつ「重層的」なイメージを与えられることになり、宗祖の人格がダイナミックに、強烈に、より身近かに、われわれに迫って来て、わたくしどもの貧弱な念仏生活に、いくらかでも厚みと深みとが与えられることにはならないだろうか。

御忌をおもうについて、報恩行の実践とは、いかに考え、いずれを目標とすべきかの反省に思いをいたしながら、「近代の法然論」に触発されつつ、所懐の一端を述べたが、おのれありさまを改めて省みて、所詮は罪悪生死の凡夫であってみれば、つねに随犯随懺・念々称名常懺悔に徹すべからざることを重ねて思う次第である。

長田芳一画／五雨みなこ文
絵本　ほうねんさま
B5変型／定価三〇〇円
右近れい子画／福嶋智誉編
絵本　おじぞうさま
B5判／七二頁／定価四〇〇円
仏教まんが・教育図書
多数刊行——
大道社
東京都千代田区飯田橋1—11—6
電話 03(262)5944 東京1—8247

花まつりに寄せて



三枝樹　亮成（みえき　りょうせい）
（名古屋市藤江寺住職
清正（きよまさ）幼稚園長）

お花まつりといえば、連想ゲームのように、花御堂・白象・花まつり行進曲と連続して頭に浮ぶ。

昔も昔　三千年　花咲き匂う春八日
響き渡った一声は　天にも地にも吾一人
立派な国に生れ出で　富も位もありながら
一人お城を抜け出でて　六年に余る御苦行
丸い世界の真ん中で　教えの門を打ち開らき
渇ける人に振りまいた　甘露の水は限りなき
何年経っても変らずに　咲いたままなる法の花
奇麗な一つを胸に挿し　吾等も負けずに励みましょう

——作詞赤尾白嶺、作曲成瀬鉄治

造花さくらの花に下げたリボンに花まつりの字が書いてあるのを胸につけ、日曜学校のこどもたちが、あちこちのお寺から、公園広場に集まり、大きい白い象の背に花御堂を安置した台車を引いて、市中の大通りを、「昔も昔も三千年」と花まつり行進曲をうたいながら、行進したものだ。懐しい想い出、幼少年期の一コマが、頭の

中をかけめぐる。4分の2の行進曲のテンポにのって、リズムも軽快で、親しみ易い曲で、歌詞も常識的な表現で綴られており、お釈迦さまの御生涯を、降誕、出城苦行、成道転法輪、讃仰と明快によく歌い上げている。法の花を胸に挿しで、造花の安全ピンを、負けずに励みましょうと掛け声をかけるあたりに、大正昭和の努力主義がピンと感ぜられたものだ。

作詞者赤尾白嶺氏は浄土宗の人だと聞いた。歌詞歌曲がよくまとまり親しみ易く、軽快で、日曜学校運動の全国的な隆盛とともに全国を風靡したものである。

仏伝によれば、降誕七日後仏母マーヤー夫人は死去され、叔母マハープラジャパラーが養母として幼なき時代のお釈迦さまを養育に当られたとある。何不自由ない地位家庭でありながら、一抹の寂しさ、空しさを味われたこともあろうと推察する次第である。法然上人勢至丸さまにおける父時国公の不慮の死、続く母との生別という痛ましいご生涯も、やはりご生涯の生きざまの間に間に散見する思いがする。

私事で恐縮であるが、浄土宗の日常勤行式おつとめの発願文について、発願文とわが母のねがいの想い出がある。私は小学校入学前、住職であった父が早逝し、母は遺児二人をたよりに寺をまもることになる。寺の努めもできず退出する習いであったが、私はある日法要か、葬儀だか脇導師の曲録にチョコンと坐らせられた。母は心淋しい折、子供が一役をつとめたので、お経を習せねばと思ったのであろう。発願文を片仮名で書いてくれた。お経本はすべて平仮名だった。一年生の読本は片仮名で始っていたので、私は片仮名しか読めなかった。「ネガハクハデシトウ……ジョウ品オウジョウセシメタマヘ」と、それは片仮名の発願文が一字だけ品と漢字で書いてあった。間もなく母も、看病のつかれから病没し、私は実家に引きとられたが、遊びのひまに習字紙に書かれたお経を取出して読むのだが、「品」だけは読めない。祖母の家は門徒でお経が違うのでわからないという。私の母は「志奈」といった。日清戦争の生れなので命名されたとか。幼い遺児への切ない願いを込めて、自分の名に

かこつけて「品」と故意に漢字で書とどめたものであろうか。今日もって私には、「ジョウ品オウジョウ」である。祖父、父、私と三代、それぞれ寺は変ったが、私も道を外れず、幼児教育こそ現代的宗教教化と続けた一生も、岡崎の女子師範を出て、女先生であった、母の姿、おもかげを忘れられない。

坂東武者熊谷蓮生房は法然上人の教えを受け、上品往生を遂げたという。先ごろ名古屋でも一月近く前進座の法然劇があり、多くの人が、何日も劇場を埋め感激にひたった。

現在親子同居で、孫二人もいて三世代だが、朝食時に食卓の向側の中一の孫が、一週間ほど急に無口となり、落着がない。変だと気付いたとき、校内暴力発生が新聞に大きく報道された。担任の先生が、その組の生徒の前で、ひと月の重傷を受けた。この先生はジット我慢したという。生徒はおろおろしたことだろう。見せられた生徒は何を感じたか。ナゼ、ドウシタラ、を判断できるよう考えさせなければならない。

このごろの子供は、物を立って食べる。いけないと言うと、どうして?とキョトンとしている。しつけ、生活訓練に対して考えの基準が変った。「しつけ」というと形の上の事が多く、礼法的なもの、押しつけの感じがする。今日では生活指導という。他人には迷惑をかけない。まわりの人に、感じのよい人と思わせるような意味合いが、生活指導である。

NHKお母さんの勉強室で見たのだが、身のまわりのしつけについて、小学2年生のある意識調査によると、食器を流しに出す、ねまきでねる、汚れたものを洗濯場へ出す、朝の洗面ということが、8割ほどが毎日できるが、それでもできない、しないが残り2割はいる。健康衛生のしつけについては、トイレ(大)の手洗いは8割、トイレ(小)の手洗いは7割はする。一面、大小ともに手を洗わないが、2・3割いる。朝の歯みがきは8割はできるが、登校前に便をする、給食を残さない、給食後口をすすぐ等になると、しないが逆に多くなる。あいさつのしつけは、子供が「お早よう」と、家庭では6割がい

い、4割がいわない。先生に対しては5割がいい、残りはいわない。友だちには4割がいうが、いわないが6割いる。しつけも家庭の目の届かないところではあまり実行されないのが実情のようだ。体育の授業のとき、着ているものを着換え、きちんとたたむ子とたたまない子とは、家庭でのしつけが歴然とする。考えねばならないことだ。

しつけは口やかましく言えば身につくが、成長してからそのようにも身につき、実行されるか。しつけの中でも、ねまきを着る、洗面・食器を返えす、一人で起る等は2年生でも、6年生でも、同等の実行率が示されているそうだ。しかし実行し難くいしつけは、学年・年齢によって、次第にくづれて行くようだ。しつけは口でいうよりも親が身をもって示してゆくことだ。両親同志のあいさつも調べてみると、「お早よう」を母は父に8割はいうが、父が母に5割しかいわない。夕食時に、「いただきます」と、母は父に6割がいうが、父は母に8割しかいわない。簡単なことだが、互いにいわない人も結構若干はいる。

母がごちそうさまを子供に必ず言うと、こどもは常に7割がいう。母がいわないときは子供も8割はいわないのということだ。これも当然かもしれない。

中学生が家庭や学校でどんな教育を受けて来たか。もうまったく放任されてきたのである。わがままな態度、自己中心的な騒ぎ、それが習慣になってしまった。家庭も学校も甘い。

若い人が自由気ままに育つ。何をやろうとも認められて、徹底的に注意されることがない。欲しいものは豊富に与えられるし、欲しくないものまで与えられる。中学生といわれる十三歳から十五歳までの子供たち、かれらは、自分のエゴ、自分の欲望をコントロールすることを習っていない。

生徒指導とは生徒理解だという米国から導入された教育理念が、社会の隅々まで浸透し、生徒を罰するという考えが影をひそめてしまった。

昔は教壇は一段高かった。先生は「皆さんと仲よく勉強しましょう」という。生徒と遊ぶのが、先生だと思っている。少年時代は相手の態度によって図に乗ることも

あれば、警戒心を抱くこともある。先生と生徒との分け隔てと意識しないで人間として付き合って行くというのが、民主教育の理念だったのが、ものわかりのいいおじさん、お兄さんになってしまった。親子の対話というが、子供にとっては、もはや対話はわずらわしい存在でしかない。核家族化が、親が育児に自信を無くしたことが、話せる親ということばで、子供にとって都合のよい頭の低い親が多くなってしまった。子供は弱い存在である。判断が充分出来ないこともある段階でもある。親に求められるものは、指導者としての役割、口にはしないがそういう見識態度である。よいお手本を示すことだ。「親のいうことを聞かない」と嘆くが、本気でいうことを聞かせようとしていない。なぜ二歳から五歳の幼児の頃、すなわち幼稚園、保育園の頃に、いうことを聞かせようとしなかったのか。本気で向き合えば親を見直すのである。中学生になってからでは無理だ。非行を防ぐには夫婦の基礎、協力、共同プレーが大事で、決定力を持つと思う。

偉大な人間は、理解のある両親、つまり母と父の姿から生れるのである。

村瀬　秀雄　著

＝好評新刷＝

『全訳法然上人勅修御伝』
B6判　八四七頁　価六八〇〇円

＝好評＝

『和訳浄土三部経』
B6判　四七四頁　価二五〇〇円

『和訳法然上人選択集』
B6判　三八七頁　価二五〇〇円

『和訳善導大師観経四帖疏』
B6判　五八四頁　価三五〇〇円

『和訳善導大師六時礼讃』
B6判　二六五頁　価二四〇〇円

取扱い　法然上人鑽仰会

法話

因縁ばなし二つ

高麗義光（こまぎこう）
（三浦市光念寺住職）

もはや、十何年か前の夏のことになるだろうか。東京湾から伊豆七島にかけての海上で、学習院大学の学生数名が時化のためヨットで遭難したことがあった。

遭難者の中に浄土宗の寺の子息が入っていた。学習院へ上げる位だから、東京でも名刹の中に入る。私はこのニュースを聞き、同宗の一人として何とか助かって貰いたいと願った。

遭難の日から程なく、私はその遭難者の祖父にあたる方の来訪を受けた。お目にかかってみると、椎尾大僧正の文化勲章受賞祝賀の席で偶然隣り合って私の印象に強く残った立派な風貌のご老僧である。

その方が低頭して私ごとき田舎の小寺の住職に向い、「何とかして無人島にでも漂着しておればよいと願ったが、事態は既に絶望です。せめて遺体が一日も早く引揚げられることだけが望みです。貴寺は三崎港でも古い寺であり、漁業関係の檀徒も多いと思う。大学や遺族からも海上捜査はお願いしてあるが、貴殿の伝手のきく限り、格別の便宜を計っていただきたい」

と、涙ながらに言われた。

幸い、檀家にも友人にも漁業関係――遠洋、近海、沿

岸の漁船の船主、船頭、無線係等の知り合いも多い。特に東京湾から伊豆七島にかけての線は、沿岸漁業者の漁場である。沿岸漁業者はそれぞれの集落に漁業協同組合を持っており、その連合体の会長は県会議員もしている親しい友人であるので私は早速わたりをつけ、集落の協同組合へはご老僧を同道して一々懇に頼み込んで廻った。勿論、大学側、警察側等からの依頼もあって、各船は既に出動を開始していたが、念には念を入れて貰おうということで頼んだのである。漁業関係者は信心深い。檀家も友人も「お寺さまのことでは」と、特別の配慮をして呉れた。

遺族は遺族で、潜水夫を頼んで海底の捜査を行っていた。たまたま、私がある組合に二度目の訪問をした時、付近の磯で潜水夫たちが一仕事終えて休んでいた。その中にも檀家の青年がいたので、よろしくと頼み、状況を尋ねた。

「大変ですよ。大がかりだから金もかかるでしょう。」

と彼は言った。その浜辺には遺族の姿も見え、寺の子息の父君もいられた。

捜査は難航して日時が空しく流れていった。

ある日、ご老僧が再び私の寺においでになった。

「この上は仏のただご慈悲に縋る他はありません。三浦半島一帯の浄土宗は鎌倉光明寺の末山でしょうから、光明寺のご本尊さまによくお願いをしたい。遺体が上ったら、孫の供養を光明寺様で行いたい。その節はよろしく」

と言って帰られた。

ところが、不思議なことに、それから間もなくして、子息の遺体は三浦半島をぐるりと一周して、鎌倉光明寺の門前、由比が浜の汀に打ち上げられたのである。

真実、遺体は光明寺ご本尊のみ手に導かれて、鎌倉の浜にたどりついたのである。お祖父さまの切なる願いは叶えられたのだと呟いて私は合掌した。

☆　☆　☆

これも二十年程前の夏のことだが、ある檀家の口ききでSという家の主人が八十歳で亡くなったから葬式をやってくれという依頼があった。早速出向いてみると、未亡人が「主人は永年新興宗教の○○会に入っていたが、私は入っていない。私の実家は浄土宗だから浄土宗の式

でやっていただきたい」という。見れば仏檀には○○会の曼陀羅が掛けてあり、榊が飾られている。
「それでいいのですか?ご主人の信仰を守られた方がいいのではありませんか?」
と私は一旦は断ったが、
「これからのお爺さんの供養をしてゆくのは私だから」
と言ってきかない。
お通夜が済み、当地の風習で翌朝早く納棺荼毘に付することになった。未亡人は曼陀羅を遺体の腕の上に置き、
「お爺さんや、これで終りだよ。このお曼陀羅はお寺さんに預かって貰うからね」
と言って曼陀羅をくるくると巻き、私に預かってくれと言った。「よろしい」と私は受取った。
告別式は午後一時から二時までと決まった。
私は一度寺に帰り、別の法事に出向いた。ところがその法事が何故か、すべてがのろのろと進行し、終ったのが午後一時直前となってしまった。時間を守ることでは私は人後に落ちぬつもりである。急ぐために車を呼んで貰ったが、運転士の中食時で車は容易に来ない。やっと車が来て動き出せば途中の道普請に手間どって、施主の家にたどりついた時は、既に一時二十分を過ぎていた。施主の家の前には大勢の人が詰め掛けていた。私は恐縮しながら式場に入った。遅刻の詫を入れるか入れないうちに、未亡人は「ああ、よかった、よかった」という。
「いや、こんな遅刻をするなんて、滅多にないことです。全く申訳ない」
といえば、未亡人は手を振って、更に、
「本当によかったのですよ。私は和尚さんが遅れればいい、遅れればいいと思っていました。そしたら、本当に遅れていらして助かりました。和尚さんに電話をかけて時間をずらせて貰おうかと思った位ですが、何しろ相手が立て続けにしゃべるものだから、電話をかけてとひとに頼む隙もなくてね」
「相手って誰のことです?」
「○○会の人たちですよ。十二時頃大勢でやって来たんです。そして、お爺さんの葬式はわれわれがやるっていって聞かないのです。お爺さんが常日頃からそういっていたというのです。だから私は、お爺さんの後々の面倒を見るのは私だから、私式にやるといってやったのです。もう和尚さんも頼んであって、一時前には来られる

といってやったら、それなら住職が来るまでここで待っているというのです。住職に逢って話をつけるというんだから、こわくてこわくて。私は和尚さんに厭な思いをさせちゃならないと思って、心の中で、和尚さん、遅れて下さい、遅れて下さいと祈っていました。そしたら、本当に遅れて来て下さってうれしうございました」

私は唖然とした。どうして、こういうことになったのだろう。それでも私は見得を切ってこう言った。

「それは惜しいことをした。一時きっちりに来て、その人たちと話合いをしたかったな」

「とんでもない。まるで喧嘩腰なんですよ、あの人たちは。お和尚さんはひとりだから負けますよ」

それにしても奇態なことだと私は思った。住職三十年今までに告別式の時刻に一分たりと遅れたことはない。それなのに何故、今日は遅刻したのであろうか。偶然の所作か、未亡人の祈りの結果か。私は複雑な気持で告別式を終えた。

翌日の夜、私は突然見知らぬ数名の男たちの来訪を受けた。二人の男が玄関の事に入り、他の者は外に立っている。外灯に照らし出されたのはいずれもジャンパア姿の壮年である。

「実はSさんのことで来ました。私達は川崎市の○○会の者です」

「それはご遠方からご苦労さまです。Sさんのことで何か?」

「S老人がお守りしていた曼陀羅を返していただきたいのです。お婆さんに訊いたら、こちらへ預けたということなので」

「はあ、預かっております。今、すぐ持って来ましょう」

曼陀羅を受取ると彼等はそそくさと帰って行った。何か悲しい思いが私を襲った。大の男が五六人も、恐らく仕事帰りを川崎から電車に揺られて、はるばる三浦半島の端れまで一本の小さな掛軸を引取りにやって来る。信ずる者にして見れば、それは正しく且つ聖なる行為であろう。燃えさかる信仰を確認する意義ある時間であろう。しかし、何か悲しい、何か空しいと私は思った。そして、自分自身の上にも思いを移し、それではお前は何をしたか。何をしようとしているのか。「念々の所作、皆これ三塗の業なり」という法語の意味を嚙みしめたのである。

一口法話

仏は平生から行者を守り給う

村瀬秀雄（むらせ ひでお）

阿弥陀仏は無量無辺の光明を放ち、選んで念仏の行者を照らし給うている。ある人が法然上人に、仏の光明によって救われるのは臨終の時なのか、それとも平生からであるのかと問うた。すると上人は「平生の時からである。平生の時から照らし始めて、最後まで捨て給わぬので不捨の誓約というのである」と答えた。それならどのようにして救われているのかといえば、仏の光明は念仏行者の貪り、怒り、愚かさという煩悩を滅し給う御力があるということである。上人は次のように仰せられている。

「仏の光明を清浄光と申し上げているが、そのわけは仏の光明に浴すれば、その者の婬貪財貪という不浄を除き、無戒破戒の罪を滅して無貪清浄の人と同じになれるからである。また仏の光明を歓喜光と申し上げているが、そのわけは仏の光明に浴すれば、その者の腹立ちと憎悪による罪を滅して、忍耐が強くて心を安らかに保っている人と同じになれるからである。また仏の光明を智慧光と申し上げているが、そのわけは仏の光明に浴すれば、その者の愚かさによる罪を滅して、思慮深く賢い人と同じになれるからである」

次に仏は念仏行者を守って、外部からの魔障を退け給

うている。上人は次のように仰せられている。

「阿弥陀仏は無数の化仏、化観音菩薩、化勢至菩薩を遣わして念仏の行者を護念し給うのである。化仏、化菩薩は二十五菩薩とともどもに行者を百重千重に取り囲み、行者の行往坐臥を問うことなくすべての時に、すべての所において昼夜の別なく、行者から離れずに守護し給うている。このような護念を被ることができて、行者の心は平静に保たれ、身は安泰となる。行者は平安に暮らし、横死がなくて寿命が延び、長命を保って天寿を全うすることができる」

行者が病気になっても、それは因縁によるものであるから、神仏に祈っても治るわけがない。上人は次のように仰せられている。

「いろいろな因縁によって受けなければならなかった病気は、どのように神仏に祈ったにしても治るわけがない。もし神仏に祈って病気が治り、寿命を延ばすことができるとすれば、誰一人として病んで死ぬことがなくなるではないか。ただし念仏を唱えている者には仏の御力によって重く受けるべき病気を軽く受けさせる転重軽受ということがある。まして行者を横難横死等の災厄から避けさせ給わぬことがない」

凡夫といえども念仏によって極楽往生できるのは仏の来迎を被るからである。たとえ臨終に死苦に悩まされ、執着と煩悩が一時に吹き出すことがあっても、来迎し給う仏の御姿を拝する時に、仏の光明に浴して顚倒している心が正念に立ち返るのである。上人は次のように仰せられている。

「阿弥陀仏の本願を信じて念仏を唱えている人は臨終に見苦しいことがないのである。そのわけは仏が来迎し給うのも行者の臨終に正念に立ち返らせるためである。それを心得ていない者は臨終に正念になってから念仏を唱えてこそ仏が来迎し給うと考えている。これは間違いであって、まず仏の慈悲が行者に加って心を乱させないために、行者は来迎し給う仏を見奉って正念に住するのである」

そしてもし念仏を唱えている者が悪鬼邪神に悩まされたり、臨終の正念を疑っているとすれば、その者は自らを恥ずべきであると仰せられているし、まず大切なことは仏を疑わずに信じて念仏を唱えることであるとも仰せられている。

エッセイ

霞と朧

木下隆一（きのした りゅういち）
（随筆家）

春もたけなわ。海も山も霞立ち、何ともうららかな季節になった。

霞（カスミ）が気象用語でないことを私が知ったのは、ごく近年である。万葉集をはじめとして、短歌に多くの作例が見られることなどから、当然気象用語と頭から決めてかかっていたのに、気象学では視程一キロ以下を霧（キリ）と言い、その薄いものを霞と言うが、霞は気象用語としては使用しない、とはっきり定められているのである。つまり霧も霞も同じもので、日中温められていた地表や細塵が夜間に冷却され、空気中の水蒸気が凝結して生じた微小な水滴が空中に浮遊するために、遠方がぼんやりして見えなくなる現象を言う、と歳時記や辞書に書かれている。

同じ現象を、春は霞、秋と霧と区別する萌芽は、すでに万葉集に見られるが、文学的に確立されたのは、古今集以後とされている。寒期から暖期へ向かう時に生じる霞は、見る者の目にほのぼのとした暖かさを与えるが、暖期から寒期に移る秋に多く見られる霧は、人々に冬に備える峻烈な気持ちを植えつけるのである。それでは同じ現象で、靄（モヤ）というのは何であろうか。視程一キロ以上で湿度は霧よりも低く、灰色に見えるものを言うと辞書にはあるが、これを薄霧、薄霞、遠霞などとどう区別するか

となると、これはもう個人の感覚の差という以外に区別の仕様はないのではないだろうか。露はさておき、霧と霞を気分的に区別するのは割合簡単である。霧は眼前に立ちこめ、音をたてて流れるが、霞は遠く微かなやさしい感じのものである。また霧にはじっとり濡れるが、霞の中に立ち尽しても、その中にいることにすら気づかず、従って濡れることもない。

俳句では、基本季語の霞のほか、殊更に春を冠した春霞(これは夏霞、冬霞の対比としてか)にはじまり、霞の海、霞の衣、霞の網等の比喩的用語、そして草霞むまで、霞に関するものは、およそ三十語が挙げられている。「鐘霞む」が霞から独立して別立てになっているのは、のどかな春の日永、鐘の音も霞むと聞いた古人が、いたく詩情をそそられたためであろう。

昼間のカスミ現象は夜間には朧(オボロ)と名を変える。このあたりが日本語の繊細なところであり、日本人の感覚の鋭いところでもある。基本季語は「朧月」だが、別立ての「朧」の中には、鐘朧、草朧、影朧、星朧等九語が含まれている。春の季語としては、私はこれらの言葉がみな好きだ。特に朧月夜と鐘霞むには郷愁を覚える。どちらも語感に少年の日にイメージされた懐さと哀感を秘めているからである。朧月夜には、小学唱歌の「おぼろ月夜」が深く投影していることは否めない。大方の唱歌は忘れてしまったいまでも、空で歌えるのは、この歌と「冬景色」くらいのものである。

菜の花ばたけに　入日うすれ
見渡す山の端　かすみ深し
春風そよ吹く　空を見れば
夕月かかりて　におひ淡し

里わの火影(ほ)も　森の色も
田中のこみちを　たどる人も
蛙(かわず)の鳴く音も　鐘の音も
さながらかすめる　おぼろ月夜

「おぼろ月夜」はこういう陳腐な詩だが、それでも

この歌を聞くたびに、胸を締めつけられる思いがする。春の夕べの情景にメロディがマッチしているせいであろうか。余談だが、この歌の伴奏には、昔小学校にあった足踏み式のオルガンが最もふさわしいような気がする。

初めて郷愁を覚えた「鐘霞む」の鐘は、松山の石手寺の鐘か、尾道の千光寺の鐘か、はたまた名もなき寺の鐘であったか、私にも判然としない。石手寺の鐘は、下敷に子規の、

石手寺へまはれば春の日暮れたり

という句があったから、印象深かったのかも知れない。千光寺の鐘は、錚々と金泥を刷いた瀬戸の海へ流れて行く夕景がよかった。

鐘の音は奈良や京都のような盆地で聞くのが望ましい。四囲の山襞に響き合い、それが娴々とした余韻を醸し出す。春なれば、霞んで聞こえるのは当然である。東京の近辺で、霞む鐘の音を聞こうと思えば、鎌倉まで足を伸ばさなくてはなるまい。鎌倉は前に海が開けているが、山が低いにも拘らず、意外に谷が深く、鐘の音を谺させるには上々の地形を備えている。お寺の数が多いことも、鐘の音を賞翫する身には有難いことである。

広島県の海沿いに竹原という町がある。古刹が点在する寺町であるが、先日見たテレビでは小京都と表現していた。しかし私に言わせれば、小鎌倉或は西の鎌倉である。前に海が開け、後ろに低い山を背負った地形は鎌倉そのものと言ってもいい。強いて違いを探せば、竹原が華やかな歴史の渦中になかったことくらいである。少年時代の数年を私は近くの三原ですごしたが、この町を訪れたことはない。一度訪ねて地酒でも酌みながら、霞む鐘の音や朧な鐘を聞いてみたいものだと思うが、いまのところ旅の予定もないので、この願い、当分はかなえられそうもない。次の二句は、私の竹原への思い入れの句でもある。

竹原はよき寺多し鐘霞む
朧夜の満月大久野島を出づ

（寄）（稿）

末法の世に仏教を思う

上野（うえの）　浩（ひろし）

極めて複雑な事象に満たされている現代社会は、一体いかなる世の中といえるのだろうか、いい世の中なのか、わるい世の中なのか、私共はどうしてもこう問いかけてみたくなる。ところで、仏教の考え方をかりれば、社会の状況を表現するのに、釈尊（仏陀）の教えが充分この世に存続して行なわれる時代を正法の時代、正法のなくなった後、仏陀の教えと似て非なる教えがあらわれる時代を像法の時代、そしてこの教えさえ消滅して、全く行なわれなくなった時代を末法の時代というように分けている。そのような見方をすると、現代はどのような時代かを私共ははっきり認識しなければならないと思う。

さて、現代は複雑で、しかも私共の意表をつくような事象すらしばしばおこる。社会的にも、善意に満ちた人々の行為は極めて多く見受けられるところであるが、また悪意から出たような行為も少からず私共の眼にふれるのであって、多くの善意の人々の美しい姿が、悪意の人々の黒い影によってほんろうされ、かき消されようとさえしているようである。ここにあらゆる事象をあげることは不可能であるが、一、二の例をあげてみるならば、私共庶民の指導者ともいうべき人々が、秘かに不当な金銭を取得してはばからず、罪悪として裁かれようとも真実を語らず、偽りに終始するものが多いといえる。また、他人より金品を奪い取り、とくに貧しい者、老いたる者、身障者などからも金銭を奪う、冷酷な人々もいる。よわい心の持主は、あるいは他人の妻と通じ、あるいは他人の夫を奪うことをする。縁によって結ばれたのに、ある男女はいとも簡単に別離をやってのける。酒にのまれた人々は人倫を忘れ、交通事故をおこし、甚だし

きは人をして死に至らしめる。しかし、これらはまだ軽い悪かもしれない。平和なるべき社会を甚しく汚濁せしめている大きな原因は、恐るべき「殺傷」が数多く行なわれているという事実である。

私は傷ましい事実を直視するには忍びないが、しかしあえてその事例の二、三をあげなければならない。まづ、生徒は師を襲い、師は生徒を傷ける。悪心の人々は、善良な人々を殺害し、甚しきはがんぜない、幼い子等を死に追いやる悲劇がある。また、親は子を殺し、子は親を殺し、夫は妻を殺し、妻は夫を殺し、祖父は孫を殺し、孫は祖父母を殺す。時には、生きながらうべき生命の尊厳を忘れ、自らの生命を断ち、あまつさえ、おのれの子等を道連れにするあわれな事件もある。これらの悲劇はほんの一端にすぎず、現実はますます悲劇性と残酷度を増して行くような気さえする。

しかし、これらの事実はまだ個人的な悲劇といえるかもしれない。一段と視野を広げると、私共はさらに恐るべき光景と情報にぶつかる。すなわち、ある国々では多くの子供等が飢えと病魔によって死し、また、国と国との間では戦争の名のもとに、多数の人間が血みどろになって殺し合っている。そして、何万、何十万という尊い人間の生命を一瞬のうちに奪い去る特殊爆弾が多量に生産されつつあるという事実を聴く。つまり、現在、私共の社会の進み行く勢いは、私共を人類の滅亡という標的に向って追いこんでいるようにさえ思えてならない。

この原因は何か。それは人間の心の中に巣喰っている、考えれば夢、幻にも等しい金銭、物財、地位、名誉などへのかぎりなき欲望が人々の心をおどらしめているからだと仏教は教える。私共は現代を末法の世、わるい世の中と決めつけては行きすぎであろうか。そして、このような社会はすでにその進行方向を変えさせることはできなくなっているのだろうか。

ところで、社会を構成する要素は一人一人の人間である。ここに私共は人間とはいかなる存在かを考えてみたい。一人の人間の存在はおのれひとりで勝手に存在することは許されないといわれる。一人の人間の存在は、周囲のあらゆる存在とかかわり合いがある。例えていうと、ここに一人の社会的成功者がありとしても、彼はおのれ一人の力で成功したのではなく、社会全体の人々、事物のおかげと関係があるのである。このように、すべ

ての人間、事物、現象はそのもの単独で存在しうるものは何一つもなく、お互いにかかわり合って存在するものである。この相依相関の理法を仏教で「縁起の法則」といっている。

次に、人間はいかに生きるべきかを考えてみたい。私共は飽くなき欲望のもたらす恐るべき結果を反省し、縁起の理法をよく認識して、一人の人間でも善業を行なえば、それだけ社会は善果を受け、一人の人間でも悪業を行えば、それだけ社会は悪果を受けることを知らねばならない。したがって、私共は人間としてなすべきことをなし、なすべからざることをなさずという「諸悪莫作、衆善奉行」の人生を送る義務があると考える。この善行と悪行とを仏教では詳しく教えている。深く修業をする人には八正道をあげ、菩薩道としては六波羅蜜多がある。しかし、これらは私共在俗の庶民には極めて行ないがたいところであって、私共はむしろ第一に、いかなることをなしてはならないかを考えるべきであろう。そしてこのことは、仏教では「戒律」として教えている。戒律とは禁戒の意味で、これも専門修業者に対してはきびしく、男二百五十戒、女三百四十八戒の多きにのぼる。しかし、在家の庶民に対してはまづ少くとも五つの戒をまもるよう指示される。これを「五戒」という。

五戒とは、不殺戒、不偸盗戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒の五つである。いま、世界に生存する四十四億の人々が、一人でも多く、少くとも五戒だけは固くまもって、殺傷せず、他人のものを奪取せず、偽りは語らず、邪淫は行なわず、飲酒をつつしみ、誤ちをおかさないようにするならば、多くの人間によって構成されるこの世界から、偽り、盗み、不倫、酒罪、そして最も恐るべき理不尽な殺傷が減少し、あるいは次第に姿を消して行くこととなるだろう。そのような時が来るとすれば、私共の社会は、世界至る所平穏となり、真の平和が訪れて、何れの人々も社会に生きる喜びを充分に味わうことができると思う。このような世界こそ、念仏行者が全霊を投入して念仏を称え、願求する妙楽浄土の姿と一致するものがあると考えられる。

私共は、穢土を変じて現世浄土とする、この夢のような願いを、特に仏教修業者の指導力をかりて、一人でも多くの人をして理解せしめ、理想世界の実現に向って、着々と歩を進めて行きたいと心から思うものである。

浄土句集

一田牛畝選

雅びたる羽子板市の江戸情緒　　東京　末常てる子

評　お正月も近づいた。浅草観音様では楼門を距てて羽子板市の人の波である。羽子板市に来れば確かに江戸情緒が残っている。夏の鬼灯市と同じだある。

餅花や女将の部屋に長火鉢　　福岡　原　敬二郎

評　餅花が飾られてある部屋。長火鉢に女将がどっかと坐っている。そして長煙管を口に咥えている。こんな女も少くなったようであるがなつかしいものである。博多産れの作者らしい。

憂き去らぬ生活にあれど大旦　　長野　友渕旋風子

評　心配ごとは去らぬかも知れないが、兎も角も大旦である。何事も忘れて仕舞って年酒の盃を重ねることにしよう。

老骨も齢には勝てず寝正月　　東京　新井　新生

評　年始廻りもせねばならぬが、屠蘇酌めば遂いに酔うて横になりたくない寝正月となって仕舞う。年は取るものでない。

山茶花や古処の裾なる藩祖廟　　福岡　上滝津弥音

評　古処山は、福岡五十二万石の黒田家の分家五万石の城がある所で藩祖廟が祀られてある。山茶花が咲いて静かである。

秋過ぎて働らく貌にもどりけり　　東京　細田　初枝

評　暑い間は身体も疲れて働く気力もなかったが、秋も過ぎると調子もよくなって顔色もよくなり働く気になって来る。

日中の僧俗秋の香積寺　　山口　上野　明達

評　善導大師千三百年遠忌が昨年であったが西安の墓に詣る道も作られ、墓の横にある香積寺も再建され、大師の御像を日本より運び法要が厳修された。日本と中国の僧の合同であった。沢山の俗人も参列された。作者はその中の一人であった。さぞ、感激されたことならん。

東京　田中　秀代
古稀過ぎて白きもの増し初鏡

東京　猪瀬　幸子
外国の話肴に年酒酌む

福岡　行正一如子
朗々と寒造歌八女の里

福岡　林　澄山
還暦の妻手習ひの筆始

福岡　荒牧　還愚
仏恩に恙なく生き去年今年

大分　丹羽　難中
黄水仙このあたりより隣り寺

福岡　権藤みきを
暁にひびく七草叩く音

三重　森　静枝
心して育てし菊の香にうまる

東京　吉田ゆきゑ
春立ちてお地蔵さまの肩丸し

山梨　青山富貴江
お念仏申し倖柚子湯かな

群馬　島津　か寿
元朝の声たんたんとお念仏

三重　山田　うた
山茶花の一ひらこぼれ古小路

福岡　服部　光代
疲れとも風邪とも夫の旅帰り

福岡　荒牧　亀齢
曽孫の声もまじりて初電話

福岡　安藤平次朗
声のして障子の内の賑やかに

山口　西村　方外
初日の出昇堂おごそか緋衣の僧

福岡　行正　明弘
悴かみて木魚打つ手を袖の中

東京　小笠原香祥
日溜りのあたり一叢菁早や

東京　真野よし子
身奇麗に老の身装ふ初鏡

東京　栗原やえ子
古稀過ぎて足ることを知る去年今年

東京　栗原とも子
悔ひ幾つ残して除夜の鐘を聞く

東京　満尾衣有子
初芝居鏡獅子舞ふ勘九郎

福岡　前田　秀峰
ハワイよりアイスクリームも土産にし

何ごとも嫁に任せて姑朝寝　**一田　牛畝**

（仏）（教）（行）（事）（一）（年）

四月、花まつり——灌仏会と卯月八日

鷲見定信（わしみじょうしん）

いまでは卯月といっても春であるが旧暦では夏であった。卯月一日は宮中では更衣（ころもがえ）であったことは知られている。冬の装束から夏の装束にあらためるのである。農作業が本格的にはじめられるときであった。人々は農事に先だって神（祖霊）を山から田に迎える必要があった。農耕生産を生活のリズムとする人々にとって、田の神迎えは最大の関心事である。卯月八日の行事はそうした経緯を示す様々の信仰習俗を残している。他方仏教の側からみれば、四月八日は釈尊の御降誕にあたっている。宮中にはじめられた灌仏会は、やがて民間にも浸透して、卯月八日の行事とわかちがたく結ばれたのが、現今の「花まつり」といえる。

〈灌仏会〉

四月八日は釈尊の御降誕を祝して灌仏会が諸寺院で行

われる。普通は花で飾られた小さな堂（花御堂）のなかに右手をあげ、左手を下げた姿の降誕仏をまつり、甘茶をそそぐという行事である。地域によっては白象を設けて巡るという「行像」もあわせて行われる。花の盛りの一日をいろどる、いかにも春らしい行事といえるだろう。美しく飾られた花御堂は釈尊が生れいでられたルンビニーの園をかたどったものといわれる。そそがれる甘茶は釈尊降誕のおり、冷水と温水がふきだしたという伝承によっている。より神話的な表現では九つの竜が香水をそそいで釈尊の身心を浄めたという伝承がいかにも似つかわしい。それゆえ灌仏会は浴仏会、竜華会ともよばれているのである。灌仏会が行事としていつ頃からインドにおいて行われたかは定かではないが、「南海寄帰内法伝」にみられる浴仏の風習や、鹿野苑の石刻に竜王が香水をそそいでいる図があることから、かなり早くから行われていたことは推定されている。中国においても、後趙の石勒によってはじめられて、これも早い起りである。

わが国での灌仏会は、承和七年（八四〇）四月八日に、律師静安が清涼殿において行ったのがはじまりであるといわれている。しかし、四月八日という日どりをみた場合、推古天皇十四年（六〇六）の四月八日と七月十五日とに斎が設けられているという記事がある。この記事に含めて、東大寺の誕生仏や灌仏器の残存から、事実上の灌仏は九世紀以前に行われていたことが推定されている。ともあれ宮中もしくは限られた寺院で行われていた灌仏会は、時代をおって一般の寺院に、そして室町中期以降からは民間においても盛んに行われるようになったのである。灌仏会が民間に浸透すれば、その度合に応じて様々の信仰習俗もうまれてくる。釈尊の降誕を祝うことだけが灌仏会の目的ではなくなってくる。複合的な儀礼目的をもつようになるのである。しかしどんな行事でも同じ過程をとるものでもない。新しい行事をうけいれるには受容する側の宗教的欲求に対応するものこそスムーズな定着をみせるのである。灌仏会が四月八日にあてられていたことはその点からは幸運であったといえよう。無論四月八日（二月八日）は降誕の日であり、日本の事情にてらして日がかえられたのではないのは明らかである。しかし卯月八日と日が重なったことはうけ入れやすかったのも事実であろう。ただし八日という日時は偶然ではないだろう。釈尊の三大法令が十二月八日、二月十五

日、四月八日と満月とその七日前とにあてられていることに象徴的な意味をみることもできよう。

〈四月八日〉

卯月八日と灌仏会を、江戸時代の「東都遊覧年中行事」にみてみることにしよう。

「(八日)釈尊誕生灌仏会賑ふ、寺院しるしつくしがたし、△諸人、門戸へ卯の花を挿す、薺草を行灯に掛けて虫除とし、又蛇よけの歌を厠へ貼る、歌は諸人のしる所也、○上野、浅草寺、増上寺、山門ひらく、○北見村名主斎藤伊右衛門、蛇よけの守りを出す、○大塚護持院山びらき……」とある。卯の花をさす。蛇よけ、虫よけの呪符がはられる。諸大寺の山門が開かれる、の三点がとくに目につく。いわば寺院での灌仏に参加し、自宅にあっては花をかかげ、虫よけのおまもりをはりつけるという一日が、卯月八日であったようである。丁度新茶の頃である。甘茶にかえて新茶を献ずることも行われた。こうしてみると民間にあっては、神を迎え、甘茶を献じ、虫害を除くという一連のつながりをもった行事とみることもできよう。行事の構成要素に従って、甘茶、花、虫よけの信仰習俗をいま少しおってみよう。

「甘茶」は前述したように本来は香水であった。一般には五香水(五種の香)、五色水(五種の香を青色水、赤色水、白色水、黄色水、黒色水とよぶ)ともいうが時代、経典等によって違いがみえていることも事実である。香水が甘茶と呼ばれるようになったのはいつ頃か明らかではない。江戸時代には、灌仏に普通の茶を用いたこともみえている。これに関連してみれば、宇和地帯では卯月八日は茶のつみはじめという伝承が残されている。また、「江府年行事」には、「是日新茶を煮て仏に供し、卯の花をささぐ也」とある。こうしてみると、甘茶(香水)をそそぐという行事から転じて、初ものである新茶を献じるという意味が附加されてきている。

また後述するが甘茶で墨をすり虫よけの呪符を書くという風習もつけ加えられてくる。さらに甘茶の呪的力について木村博は、「甘茶を頂いてきて飲む。或いは眼や耳など体に付けると病気にならないとか、蚊帳にふりかける、家の周囲に撒く、そうすると甘茶の呪力によって悪病や長虫(蛇)等の害を防ぐことができる。……「甘茶」

でなくとも、この日新茶を摘んで神仏に供え且つ飲むと長生きする」（「日本民俗学」、一二八号）ことなどを挙げている。こうしてみると、本来釈尊を浄める香水が、民間定着の過程で意味が変化もしくは広がりがでてきていることがわかる。

ついで「花」に目を向けてみよう。花御堂は今ではきれいに色どられた塗り物が多くみうけられるが、庭や野原で摘んだ花を屋根や柱に飾りつけていることもまだまだ多い。素朴な美しさが感じられていかにも村の花まつりという印象が残る。こうした感覚は、この日に山に登り花を摘んできたという民俗慣行によってささえられているからであろう。山遊びや花摘みはいかにも本格的な農作業を直前に控えた人々のいこいの時をおもわせる。野遊び、花見もこのときに行われている。しかし一日の行楽のようにみえても、その本意は神迎えにあることも事実である。遊びか神事か判然しないと考えるのは、現代の感覚である。神仏とのコミュニケーションは秩序だった、儀式的な面だけにあるのではない。いわば神とともに遊ぶといった側面も重要な神事の一部であったのであろう。卯月八日を山の神の祭の日とするところ（静岡県）や祭日（三峰神社）とするところなども多く、山開き（大峰山）の日となっているところもある。山などの高いところに登るだけでなく、新仏の墓参りなどもこの日に行われている。花折始めの習俗も卯月八日に他家に嫁した子供が墓参りに帰る日（兵庫県）の行事である。最も代表的なものが「天道花」に代表されるものである。高い竿の先に花を結んで高くかかげるものを指している。この他同様のものには軒先に花を挿しておくこともある。大概関東以北は軒先または門戸に、関西以西は竿の先にかかげるといったわけかたができそうである。高い山に登る、花を摘む、高所に花をかかげる。これらはいづれも一つのことを意味している。山や天上から神を迎えるためのものである。花は依代であり、神にささげる供物でもあった。この日に田に下りてくる神は視霊でもあったことは、新仏や先祖の墓詣りにみることができる。

花による神迎えと並んで行われている行事に、「虫よけ」がある。農耕生産の過程で大きな危険は作物をくいあらす虫の害であり、人間に害をあたえる蛇の害でもある。それゆえ虫除けを田の神にも願い、呪符によって危険をさけようとする。甘茶ですった墨で「千早振る卯月

八日は吉日よ神さけ虫を成敗ぞする」と書いて貼りつけることが行われた。この呪符はかなりの広がりをもっていた。地域によっては「昔より卯月八日は吉日よ神さけ虫を成敗ぞする」とよまれたり、「千はやふる卯月八日は吉日よ、かみなか虫のせいばいぞする」などといくらかの違いがみられる。五来重は、これを「神下げ、虫を成敗ぞする」とよんで、神（祖霊）の降臨によって虫害をさけるのが本義とみている。卯月八日の核をなしているのは田の神迎えであったことがより明らかである。

〈年中行事と四月八日〉

年中行事において重要な折り目は一月十五日の上元、七月十五日の中元、十月十五日の下元の三元であった。この一週間前が物忌にはいる日である。一月八日、七月七日、十月八日である。柳田国男は上元と中元の間、四月十五日も三元と同様に重要な折り目でなかったかという。柳田説をうければ四月八日は十五日への物忌にはいる聖なる日であった。農耕生産にとって重要な日が折り目と考えれば、四月八日は播種、田植に先だつ日であったことがわかる。春の予祝行事に対して、本格的な生産活動を開始するにあたっての行事は山から神（祖霊）を迎えることにはじまる。それが卯月八日の中心的なモチーフであった。

しかし仔細にみれば春の農耕儀礼も卯月八日の行事にとりこまれていることがある。こうした例をも含めて考えれば、仏教の影響が強く働いて、四月八日がより重要な日として意識され、行事が集中してきたといえるだろう。

◇〝浄土句集〟欄投稿要項

一　ハガキ一葉に四、五句づつお書き下さい

一　投稿先——

〒812　福岡市博多区中呉服町10—14

正定寺　一田牛畝先生宛

〒102　東京都千代田区飯田橋1—11—6

法然上人鑽仰会

（読）（者）（の）（べ）（ー）（ジ）

念仏諸行

島田信一（しまだしんいち）
（福井県大野市在住）

今日、現代ほど文明文化の発達しました時に此の社会に於て私等は、ほんとうに感謝しながら喜こばなければならないと思います。

又此の自由な時代と社会に生れあわせていただき、光明の有り難さを、よろこばずには居られません。但し又此の自由には責任と義務があると思います。

現在の社会の様想を見ますに、重大なことは法の自由の暴走です。

この暴走の悪業の結果、あらゆるところに犠牲が生じています。いまわしいことであります。

教育の場である校内暴力、又家庭内暴力、又職場に於ても同様、交通事故による犠牲及び少年少女の自殺等、誠に残念なことであります。

もう少しゆとりのある時間がほしいものであります。

此のゆとりの時こそ、少しでも仏の教えを聞かせていただいたらと、心より願いたいとおもいます。

巷の世間には現実の利を求める書物など沢山ありますが、仏教に関係した書籍も少なからずです。

しかし此の仏教の書物は歴史や伝説を説く内容が甚だ多い事です。

仏教とは誰でも聞いて解っていて、しかも解らないのが仏教だと思います。

先祖の供用(養)とか法要とか申しますが、私の思いますには、煩悩の因縁によって、今ありますところの私たちの因果について、感謝の供養だと思います。

そして又、私たちの煩悩の因縁を少なくしていきたい願いが念仏だと思います。

今、光明をいただいて生かされている私たちは、私たちの命だけは大切にしたいものであります。

お念仏の尊さを聞かせていただきたいものですね。

吾々は二人の親様から生まれました。

その二人の親様には、それぞれ二人宛の両親様が居られます。更に夫々の親様に両親様がおられます。この親様を十代逆のぼると、実に、一千一百四人の親様があります。又、三十代逆のぼると、逆算して等比数列の公式によるとなんと驚くなかれ、およそ、二十一億四千七百四十八万三千六百四十六人です。

その巨万の血の流れを受けて、いまここに我が身があります。その人々に、それぞれの兄弟姉妹がおられたことでしょう。考えて見る

と、世の中一切の衆生みな宿世の父母であります。
いわゆる赤の他人は無いことになります。
それで一切の男子は父であり、一切の女人は母と思って互いに孝行の仕合であります。
然らば世界は極楽浄土と、なると言う意味を心地観経報恩品に説いてあります。
世には自分が親孝行せずして、子に向いて孝行を強いる親もあり、又孝行しようと思い、始めた頃には親はなしと歎く人もあります。

夫婦の婚姻は合意と契約とによって、成立したものだから、都合で離婚して、元の他人に戻ることもあり得る。
然し親と子の関係は決して合意ではない。
親は子供を選ぶことも、又子供は親を選ぶことも不可能であります。全く不可思議な因縁によって、親子となったものであります。
近頃は子供を、つくると言う言葉を使うが、最も神聖であるべき性殖を冒瀆した不遜極まる言葉であります。
つくれるものなら、うまくつくれそうなものだが、そうはゆかない。
そんな考えだから胎児を闇に消して平然としておられるようだが、恐ろしい罪悪であります。
必ず応報を受けねばならないでしょう。
昔から、吾等の先祖は子宝と言って天地大自然から、或は祖先の聖霊から授かったものと考えて、慈しみ育てたものであります。今や、親と子の断絶という忌わしい言葉を、横行させてはならいとおもいます。

親に孝行
子に慈愛
妻宝極楽一家繁栄

みなさん今一度考えてみましょう。

＝新刊＝　寺内大吉著

『念仏ひじり三国志』を読みて

渡辺杜水（わたなべとすい）
（浄土宗西山深草派大本山円福寺法主）

副題「法然をめぐる人々」として本誌に連載、すでに十年に近い歳月を経て、百四回に及ぶ。今回、これが単行本となって第一巻が書肆の店頭に出た。全五巻の第二巻は一月末に出ると予告されている。裁幀、村上豊氏、さし絵は本誌連載の松濤達文氏、美事なカバー、内容に変りないが手ざわりの重厚さ、一本を購って、まづ飛び読み、かつて十年前に『浄土』で読んだ筈だが記憶もうすれて、全く新らしい感激を覚えた。やっぱり重みがちがう。愛着し秘蔵したい一本である。

十年前、本誌に、はじめて掲載されたとき、われわれの元祖上人和順大師をどんな風に描き出されるか、直木賞作家の文才をもってしても、祖師の伝記は洪範、多岐にわたり、文献考証も各種沢山あることだから、それをどう処理取捨するか、大きな期待をもって読み継いできた。ところが真先きに何より驚嘆したことは、ありふれた伝記文学の様式をかなぐり捨てて、直ちに法然時代の頂点から時代の文物、人間像を露出してゆく、という描き方、即ち時代の歴史を語り、時を、人を描き、仏教思想を解説して、その間に法然上人の浄土教の片鱗を随所に見せる。いうところの

「法然をめぐる人々」によって法然上人の全容を浮き彫りにしてゆく手法、そして「念仏ひじり」の動きによって立教開宗された元祖上人の動静、風貌などまで広く深く見せて読者をひきずってゆく。それが巻頭からの筆勢であるから驚いたのである。流石に作家の独特な表現方法に感じ入った次第である。

祖師の伝記という先入観でいうならば、いかに上手に立派に構成されても屋上、屋を重ねるだけのもの、さほど驚くことはないと思う。ところが、これは単なる伝記物語でないところに興味もあり、深みもある。

まさに表題の通りに「法然をめぐる念仏ひじり」たちの三国志である。その中にうごめく毀誉褒貶、喜怒哀楽、また愛憎の綾が入り乱れて大河物語をなしている。

この第一巻の初めから出て来るのが信西であり、明遍であり、是憲（遊蓮房円照）である。また住蓮、安楽の若い姿も出て来る。すでに念仏の興行は都鄙にみなぎっている時代、それから始まって十年連載、驚きに堪えないところである。まだ、どこまでも「三国志」は続くであろう。

第一巻の目次、妖兆、兵乱などと二字に約して全十二章。奈良東大寺の炎上から重源の活躍、源平の抗争、やがて源氏の時代と、法然上人の頂点から筆を起して延々、百余回にわたる連載、今なお晩年の法難を活写してあますところなし、念仏ひじりの活躍、その中心にある法然像、端然として静かに口称念仏していられる姿が彷彿としてうかびあがってくる思い、全五巻の完結による偉容を今から楽しみにしている。

慈円の「愚管抄」、九条兼実公の日記「玉葉」、その他の文献を抄出して実証すると共に、大胆な虚構も設けて読者を魅了する文学の力は大きい。心より推奨する所以である。

—昭和五十八年一月稿—

◎『浄土』表紙版画絵販売についてのご案内

『浄土』誌の遅配が続いており、まことに申し訳ありません。

どうか今後もまた、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、大西耕三先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20㎝×30㎝位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30㎝×50㎝程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の分、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

（申し込み先）〒102　東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会　振替（東京）八―八二一八七

念佛ひじり三国志（百七）

―法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵　松濤達文画

一

安楽房遵西はいつ処刑されたのであろうか。花洛の出来事は巨細にかかわりなく丹念に拾ってくる藤原定家の「明月記」にもその記述はない。

法然諸伝がつたえるように六条河原に数百の群衆が集って、処刑される安楽房と念仏を同唱したのであれば、定家が見聞を脱落させるはずがないであろう。

わずかにそれらしき記述が、二月二十二日の「京中又騒動、親能法師ノ辺リ、軍兵群ヲ成スト云々。其ノ故ヲ知ラズ」だ。安楽房の一族である中原親能邸の付近が騒

がしくなり、鎌倉武士が出動したというのである。この騒動のさなかが、直後のどさくさであったか。

それを裏付けるように二月二十八日に「法然流罪」の宣下が発せられている。

太政官符　土佐国司

流人藤井ノ元彦

使左衛門ノ府生清原ノ武次　従二人

門部二人　従各一人

右流人元彦ヲ領送ノタメニ、クダンラノ人ヲサシテ発道クダムノ如シ。国ヨロシク承知シテ、例ニヨリテ是ヲ行へ。路次ノ国、マタヨロシク食済具馬三匹ヲ給フベシ。符到奉行。

建永二年二月二十八日　右大史中原朝臣判

左少弁藤原朝臣泰茂

とある。

追捕の検非違使は宗府生久経、領送使は左衛門の府生武次だった。

法然は藤井元彦という罪人の名を冠せられている。この時点では流罪先が土佐だったようである。

京都の出発は、どの法然伝も三月十六日で共通する。「四十八巻伝」はその模様をこう描写している。

三月十六日に花洛をいでて夷境に赴むき給うに、信濃国の御家人、角張の成阿弥陀仏、力者の棟梁として最後の御ともなりとて御輿をかく。同じさまに従い奉る僧六十余人なり。およそ上人の一期の威儀は、馬車輿などに乗り給はず、金剛草履にて歩行し給ひき。しかれども老遇のうえ、長途容易からざるによりて乗輿ありけるにこそ。お名残りを惜しみ、前後左右に走り従う人、幾千万という事を知らず。貴賤の悲しむ声巷に満ち、道俗のしたふ涙地をうるおす。彼らをいさめ給ひつる言葉には、駅路はこれ大聖のゆく所なり。漢家には一行阿闍梨、曰域には役優婆塞、謫居は又権化のすむ所なり。震旦には白楽元、吾朝に菅丞相なり。在纒出纒みな火宅なり、真諦俗諦しかしながら水駅なりとぞおほせられける

小松谷の御堂を出て、京の街を出るまでは盛大な見送り人が路傍に立ち並び、また門人の念仏ひじりたちが輿の左右を随行していったようである。

法然伝はこのあと、鳥羽の南門より川船に乗りこんだとある。おそらくこの乗船から随行者もなく、法然は完全な流罪人になったものと思われる。警固の役人以外に誰もいなかったらしいことは、最初に上陸した播磨国高砂の浦での描写でも明らかである。浜辺でおびただしい

待望の本格〈仏教〉歴史巨篇・毎日新聞社から刊行!!

《本誌連載中の大長篇歴史小説》

念仏ひじり三国志

—法然をめぐる人々

寺内大吉著

現代によみがえる法然の時代——　直木賞作家が十年の歳月をかけて遂に完成した法然像——

四六判・上製　全五巻（各巻定価一三〇〇円）

※第一・第二・第三巻好評発売中　＝第四巻は五月中旬発売予定＝

善男善女が結縁を求めてきたが、法然の身辺には誰一人いないのである。全く単身でその善男善女たちに念仏を授けている。

僧都明遍はその日の朝、卿二位兼子から使者をもらった。岡崎の邸へ急ぎ来て欲しいという依頼であった。遁世を志す者がいる。出家の戒師をつとめてもらいたい。

その日とは法然が流罪の旅へのぼる前日、三月十五日であった。

明遍が出かけてゆくと、遁世の希望者とは兼子の弟で、民部卿の範光だった。

「大相国もずいぶん骨を折ったのですが、那智ノ検校や僧都たちが院をそそのかして、どうすることも出来ませぬ。極刑を……」

喰い止めるのが精一杯で、法然は明日流罪の旅立ちをする、と兼子は告げた。

「安楽房や住蓮も処刑されたらしい」

「そのことなのです。この民部卿は兼ねてから篤信の念仏者で、もう生きるのも嫌になったとこの数日来言いとおしなのですよ」

かたわらの弟をかえりみた。

誇張ではない証固に、範光の表情は沈痛そのものだった。

出家の受戒を開始しようとするとき、範光は念を押してきた。

「先刻来、申上げているように私は専修念仏に帰依している者です。明遍さまは三論義の学匠。教義のうえでたがうところはございませんか」

明遍が答える前に姉の兼子が言葉をさしはさんだ。

「教義がたがうも何もこの明遍僧都は、法然お上人の一命をお助けするために、それはたいへんな御尽力だったんですよ。私や大相国も明遍さまの熱意に負けて、院をお諫さめしたほどです」

この女権力者、やはり計算をしているな、と明遍は少しシラけた思いになった。

つまりわざわざ出家の戒師として自分を招いた本音は、弟が専修念仏者のままで遁世されたら、累がわが身に及ぶことを恐れたにちがいない。明遍なら立派な僧都、体制者側の者だったからである。

民部卿範光の信仰は純粋だった。彼はこの六年あと建保元年（一二一三）四月五日に死ぬが、臨終の前夜ひとり

の高僧が枕辺に立つ。
誰人にましますぞ、と問うに、我はこれ源空なり。唐にして善導と名づけ、此の土にしては源空という。此の界に来て衆生をみちびく事すでに三箇度なり。今汝に命終の期を示さむがために来臨す。
と、「四十八巻伝」は書いている。その健保元年は法然が入寂した翌々年にあたるのである。
――正念に安住し、称名相続して往生を遂ぐ。不思議の事なりけり。
と、結んでもいる。
「明月記」にも三月十五日の記載に「今日、前中納言範光卿出家(直衣、院ニ参ジテ退出ス。岡前ノ堂ニテ之ヲ遂グ)とある。法然が流罪の旅へのぼる丁度前日に、こうした貴族が出家遁世している事実は注目しなければなるまい。
一説には、この年十一月、法然は赦免され四国から筑前の勝尾寺へ帰ってくるが、その赦免の宣旨筆者は岡崎中納言範光だったとも言われる。
「明遍さま、ちょっと気にかかることがございます」
受戒の儀がすべて終ると、範光は姉の兼子が席を立った際をとらえてささやいてきた。
「何かあるかな」
「お上人は明十六日に出発なされます」
「そうらしいな」
「明晩は鳥羽の川船のなかで一泊され、その翌朝に出発なさいます」
「それが……」
「院も同じ晩、鳥羽に泊られるのです」
「同じ晩に院がか?」
後鳥羽院が法然とすぐ間近な場所で一夜を明かすというのである。不吉な予感が範光の胸を去来していたようである。

二

民部卿範光は卿二位兼子の弟で、このとき五十四歳だった。承明門院の叔父にもあたる。いわば後鳥羽院にとっては〝内輪の人間〟である。
それが、いきなり前ぶれもなく出家だ。ある意味で、後鳥羽院への裏切り行為と言わなくてはならない。

「院の手で、ご処分を受けても悔いません」
三月十七日の朝まだき、明遍と連れ立って鳥羽へゆく道すがら範光中納言は決意を表明した。
「命をかけるほどのことが起こるのか」
「起こるかも知れませぬ」
「院は……」
「そうです。高野山へ登るためとおっしゃって、昨日から鳥羽の精進屋へはいられましたが、そのねらいはお上人の命かもしれません」
「まさか。法然ご房の首が欲しければ、さっさと門弟ら同様に処刑してしまえば良かりそうなものだ」
「それでは騒ぎが大きくなりすぎます。法然ご房を処刑したとあれば、念仏信者はもちろん心ある公卿や武士たちも黙ってはいますまい。それと、院のご趣向から申しても剽盗に化けて襲いかかるのがお楽しみでございましょう」
「剽盗に化けて襲いかかるのか」
範光中納言は幾つかの先例を語った。
山崎の山中に棲む賊の一味を逮捕するとき、院自身が少数の側近を連れ、賊の仲間と見せかけて山中へはいりこみ、彼らと悪事の企らみを相談するさなかへ検非違使の手の者に急襲させたりした。
また野盗の捕縛を、夜を徹して見物したり、逮捕された一味のうちに院自身がまじっていたりする笑えぬ一幕もあった。
「それで中納言は、院のお方がお上人を襲ったらどうなさるつもりかな」
「どうなさるとおっしゃられても……この老骨、御前へおどり出てゆくだけでございます」
「御前へ飛び出していって、どうなるのだ。中納言自身が斬られるのが落ちでござろう」
明遍は足を停めて、範光の顔を覗きこんだ。
「多分、斬られるでしょう。あるいはその前に私の刃が院のお方を斬り伏せているかもしれませぬ」
「院のお方を、斬れるか」
「斬れます」
範光はきっぱりと言いきる。
「しかし、中納言は院の寵臣ではないか。だいじな主君を斬ることは人道にもとることになる」
「人道にはもとっても、仏意にはかなうのではありませ

ぬか」
「人道と仏意か」
「院のお方は、人間でございます。しかし、法然お上人はみ仏。と申して言いすぎならばみ仏に仕えるお方です。どちらかが刃の錆になるとしたら、それは院のお方でございましょう」
明快な論理を中納言範光は胸に蔵しているようであった。
当時の鳥羽周辺は水郷だった。桂川が尽きて、淀の大河にひろがる咽喉元に位置していた。鳥羽の離宮があり、「栄花物語」は、「九条のあなたに、鳥羽という所に、池山広う面白う造らせ給う。十町ばかりは池にて遙々と四方の景色にて、御舟浮かべなどしたる」とその風色を叙述している。
鹿ヵ谷事件で平家の手にかかって殺された大納言成親は、別邸を造り、洲浜殿と称した。「眺望四方晴れて、地形水色、興をまし、哀れをもよおすところなり」と「平家物語」も書く。
現在の「鳥羽ノ渡シ」あたりが船着き場だったらしく、此処から南方の難波方面へ向う淀船が出た。この付近には〝精進屋〟が多くあった。熊野参詣へ出立する前、そこに籠もって潔斎するのである。
後鳥羽院にとって、これらの精進屋とさらに淀川南方にあった水無瀬離宮とは恰好の活躍場所だったのである。駿馬を駆使して山野、水際を駆けまわり、季節がぬるめば野草のかげで啼く郭公の声に耳を傾けて詩情を満たした。
この時点で、後鳥羽院は高野山へ登ることを理由に精進屋入りをしている。
明遍たちが船着き場に達したとき、そこは黒山の人だかりであった。黒衣のひじりがいた。武士がいた。狩衣を羽おった貴人の女性がいた。貧しげな庶民の男女たち。
「お上人はどこだ」
範光は誰にともなく問いかけた。
「未だ新御堂においでですよ」
誰かが答えた。
鳥羽離宮の一隅を占める安楽寿院。その南端に九体の阿弥陀尊像をまつる御堂があった。九品の阿弥陀仏である。久安三年（一一四七）の八月、鳥羽法皇の勅願で造立

された。新御堂と呼ばれた。
どうやら法然は、そこで一夜を明かしたらしい。
「いってみますか」
範光の問いに明遍は答えずに歩き出していた。
——法然に会うんだ。
この瞬間、はじめて明遍の五体を〝戦慄〟が走った。そうなのだ。感動と呼びたいところだが、悦びや感慨の先を、恐怖感が突っ走っている。〝戦慄〟としか言いようがない。その激情が明遍を大股で法然のいる場所へ接近させようとする。
長年にわたってライバル視してきたからであろう。法然を敬慕する前に、いつも嫉妬の情が湧いてきてしまう。法然なぞに負けてたまるものか、という敵意にさえふくれ上がった。
こんな感情が底意になって、明遍は専修念仏の断圧に間接的ではあるが手を貸してきた。恐怖や戦慄もそのうしろめたさに根ざしているのだろう。
いま、はじめて法然と会う。厳密にははじめてでないにしても、明確に相手の立場を認識し、またその思想を領解しきった上で面接するのは、今日がはじめてだ。
しかも相手の法然は虜囚の身ではないか。
新御堂へは淀川の堤上、松林を縫ってゆく。その道にも念仏信者たちが三々五々、路傍に立ちつくしていた。法然の姿が現れるのを待ちかまえているのだった。ひと目拝がみたいと熱望する。最後の念仏を同唱したいのである。
だが一町もゆくと、道は人垣でさえぎられた。検非違使の武士たちであった。誰人もこの先へ踏みこんではならないのである。
「新御堂へまいりたい。ひと目法然お上人に」
「なりませぬ」
然るべき名の官人と思われる警固の隊長はきっぱりと拒絶した。
「わしは中納言範光ぞ」
「あ、民部卿の……」
彼は範光の身分を知っていた。
「こちらは高野の明遍僧都である」
「さようですか」
「決して怪しい者ではない」
「わかっております」

「通してくれ」
「なりませぬ、民部卿」
態度は慇懃だったが、妙に頑固である。
「何としても?」
「何としてもです……それが、法然さまのお為だからです」
この官人、ちょっと悲しげな表情をする。法然に好意は寄せているにちがいない。
だが、好意だけでは突破できない厚い壁が明遍たちのゆくてをさえぎっているようであった。
法然に遇えるんだ、と気おいこんできた明遍の戦慄は、たちまちしぼんだ。
「明遍さまではございませぬか」
足もとから声をかけられた。
鈍色の僧衣をまとった若い顔が堤の切れ端を覗いた。下の汀から登ってきたという様子だった。
「おお……」
正真房湛空であった。嵯峨二尊院の復元に奔走している〝山ノ僧〟——だが現在はまぎれもなく法然門の念仏ひじりである。

三

念仏禁断の布令が発せられている。
と、正信房湛空は強調した。
つまりこの堤上で法然が、彼を慕う善男善女たちと称名念仏を合唱したりすれば、それだけでも罪科を加重する口実になる、と言うのである。
「罪科の加重とは?」
「流罪では済まされなくなるのです」
「斬られる?」
明遍はかたわらの中納言範光へ視線をうつした。彼は大きくうなずいている。
「そうか。念仏禁断……それだったのか。その法を犯す者として処分できるということになる」
「院のお方ご自身がか」
「誰かが入れ智恵をしている。院のお方はそのように陰険なお人柄ではない。法にこだわるお方でもない」
後鳥羽院は天衣無縫なご性格だというのである。
さらに言えば、冒険と奇行を好む野性味あふれた性格

にすぎない。
ただその性格を利用した側近が、専修念仏の隆昌を「天下の乗っ取り」だ、と誇大視して吹きこみ念仏禁制を布告させた。門弟たちを次々に処刑し、あまつさえ流罪とした法然が花洛を出立するいま、別れを惜しむ門弟信徒たちと高声念仏で声を合わせたら、その瞬間に一網打尽、逮捕あるいは斬首してくれる、とたくらんだのである。
「だとすると、あの検非違使の者は?」
明遍は新御堂への道を扼して、念仏者たちが法然と接触したがるのを、身を挺してさえぎっているあの官人は、法然の生命を守っていることになる。
「そうなんです。彼は古くからの念仏信者、大和入道見仏にみちびかれたと申しておりました」
大和入道は後白河法皇の側近で仕えた。一時、検非違使に出仕していたこともある。そのころのつながりを、専修念仏帰入で生かしたものであろう。
その木部次郎という北面ノ武士によれば、このまま法然が堤上を歩き船着き場から乗船するのは、きわめて危険である。念仏高唱の渦が湧きおこり、たちまち一網打尽の逮捕劇が飛びかうにちがいない。
「唯一つの方法は、新御堂から水路づたいに船着き場まで出てゆくしか方法はございません」
と正信房湛空は言った。
「水路づたいにか」
「目立たぬ小舟に、それも蘆刈り舟にお上人をお乗せして運ぶというのです」
新御堂は水田の一隅に建っている。この淀川へそそぐ水路は幾つもあった。
その計画を木部次郎から聞きだした正信房湛空は、川船を備ってすでにこの下の川岸で待機しているんだそうである。
「せめてお別れを、舟の舳先を並べて……」
「湛空どの。わしらもその川船に並せて預けないだろうか」
「お二人ですか」
「お願いします」
と中納言範光も懇願した。
船頭に訊いてみないことには、と湛空は汀へ降りていった。

なるほど川船とは言っても粗末で小ぶりな釣舟にすぎなかった。

「沈むことはないが、舟足はだいぶ遅くなる」

漁夫は笑った。

三人は乗りこんで、舟を少し上流へ進めさせた。新御堂に通じているはずだ、と船頭の漁夫が主張する水路の角口で待機した。

正信房湛空が書いたと伝えられる「四巻伝」は、このときの模様をこう書いている。

同日、大納言律師公全、西国へながされ給けるは、律師の船、さきに出けれども上人、くだらせ給うと聞きて、しばらくおさへて上人の船に乗りうつりて、律師、一目をみあげて上人の膝に、かしらをかたぶけて、泣く声天をひびかすといえども、上人は声も立てず、念仏しておはしけるほどに、律師の船より、とくとくと申しければ、いよいよ名残りを惜しみながら本船に乗りうつり給いにけり

大納言公全律師を正信房湛空自身だとする説がある。「拾遺古徳伝絵」は、「聖人、都を出で給う日、公全律師（聖信上人是也）も配所肥後へ赴きたるが……」と書いて、同一人としている。

だが自分のことを書くのに〝敬語〟で叙述するのはおかしい、と否定する説もある。たしかに系譜上の公全は、信西入道通憲の孫貞雅の息で、僧都にまで進叙した人だ。宰相とあるから大納言であろう。しかし流罪になった経歴はない。

湛空と公全が同一人物説は無理にしても湛空自身が法然出立の日、鳥羽の船着き場までゆき、さらには水上で舟を漕ぎ寄せて名残りを惜しんだことだけは、ほぼ間違いあるまい。

では、「四巻伝」はなぜ公全律師なぞを持ち出してきたのであろうか。

これが書かれた時機を考えねばならない。「四巻伝」は〝嘉禄の法難〟（一二二五）の直後に編述されている。この法難は嵯峨の清涼寺を拠点とした念仏者への断圧がきびしく、すぐ近く二尊院の正信房湛空の身辺にも危険が迫っていた。そんな状況下で書かれた「四巻伝」であ

る。違法行為は、神経質に筆を韜晦させるのは自然であろう。

明遍たちの釣舟は、水路を少しはいって芦のかげにひそんだ。

「大丈夫かな。この水路を来るのかな」

湛空は不安げである。

「間違いございません。新御堂から淀へ抜ける道は何本もあるようで、最後はこれ一本なのです。あとはみんな途中で田へ流れこんだり……」

陸路にさえぎられたりする、と漁夫は断言する。長年にわたってここの水郷で生きてきたらしい漁夫の言葉だ。信頼するしかないであろう。

やがて、

「来たぞ」

と漁夫はつぶやいた。

生い繁る芦の葉越しに覗きこんだが、いっこうにそれらしき気配はなかった。

突然、水が掻かれる音がしたと思ったら、もう法然を乗せた芦刈り舟は明遍たちの眼前にいた。

法然をはさんで前後に二人の役人が坐りこんでいた。

あとは船頭だけだ。

「お上人さま、正信房でございます」

呼びかけた湛空の声はもううるんでいた。

「範光にございます」

中納言も名乗り出た。

法然は彼らに黙ってうなずきを返しただけである。しかし、表情はおだやかになごんでいる。口もとがかすかに動くのは、口称念仏をやめないからであろう。

「高野の明遍です」

明遍が舟ばたへ身を傾けて顔を突き出したとき、はじめて法然の表情が動いた。

「僧都も来ておられたか」

唇から言葉さえ洩れた。

「おやつれもなく」

何を口にしていいのかわからない。殆んど初対面のくせに、そんなことを言ってしまった。

（つづく）

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時、「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞ振ってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

一、**内容**　自由（生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におまとめ下さい。）

一、**枚数**　四百字用紙五枚程度

一、**締切**　毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一ヵ年　金三、〇〇〇円（送料不要）

浄土　四十九巻　四月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和五十八年三月二十五日　印刷
昭和五十八年四月一日　発行

編集人　宮林昭彦
発行人　佐藤密雄
印刷人　関二三男
印刷所　長谷川印刷㈱

東京都千代田区飯田橋一―十一―六
発行所　法然上人鑽仰会
電話東京二六二局五九四四番
〒一〇二　振替東京八―八二一八七番

第四十九巻　四月号
昭和十年五月二十日　（第三種郵便物認可）　毎月一回一日発行
昭和五十八年三月二十日印刷　昭和五十八年四月一日発行

＜『浄土』誌連載中の大長篇歴史小説＞

待望の本格〈仏教〉歴史巨篇！
毎日新聞社から好評のうちに発売中!!

念佛ひじり三国志
―法然をめぐる人々
寺内大吉 著

四六判・上製　全五巻（各巻定価一三〇〇円　〒各二五〇円）

直木賞作家が10年の歳月をかけて遂に完成
香り高い歴史ロマンの超大作

―第一・第二・第三巻発売中―

毎日新聞社
〒100　東京都千代田区一ッ橋一ノ一
振替（東京）四―五六五三四